

はじめに

本書は、薬業界の専門紙『薬事日報』に不定期で連載中の「薬の名前には意味がある」(本書と同名)というコラムから、2020(令和2)年4月30日から2022(令和4)年1月19日までに掲載されたものを選別して、再編したものです。そのベースとなるのは、私が勤める大学の薬学部で学生たちの学習意欲をかきたてる副教材として役立てようと考えて、執筆した『薬名[語源]事典』(武蔵野大学出版会、2020年)(760頁もある電話帳のような分厚い本)です。はじめに、これまでの経緯をお伝えします。

みなさんは、薬の名前を見て、どんな印象をもつでしょうか。私自身は、子供のころに病院でもらった薬の袋に書いてある薬の名前を見て、「カタカナだらけで暗号みたい」「怖い感じもするけど、ちょっとカッコいいかも…」「一体どんなものなのか知りたい」と感じたのを覚えています。いつしか薬に興味をもち薬学を志したのも、その影響かもしれません。

大人になった私は、大学の薬学部で薬理学を教える立場になりました。薬理学は、医薬品がどのように体に作用して病気を治してくれるのか、その作用機序を扱う学問です。医薬が進歩した現代においては、誰もが病気にかかったときに薬に助けられた経験があり、自分や家族に関わる薬などには自ずと興味が湧きます。私の授業を受けている学生たちも、薬の作用に関する説明に対しては「知りたい!」という好奇心をもって聞いてくれます。しかし、最終的には必須の知識として「カタカナだらけの薬の名前」をたくさん覚えなければならないという点については、多くの学生が嫌がっているようです。

私が学生のときは、とにかく薬の名前は丸暗記していました。薬効や化学構造が似ている一部の化合物群に対しては、同じ響きが名前につけられている(いわゆる「ステム」が定められている)ということは知っていたので、アドレナリンβ受容体遮断薬(-olol)やベンゾジアゼピン系カルシウム拮抗薬(-dipine)などをまとめて覚えるときには活用していましたが、

少しくらいステムを知っていても「たいして役に立たない」ということもすぐに分かり、結局は「丸暗記しかない」と諦め、ひたすら「何でも口に出して言う」という作戦で薬名を覚えていました。

しかし、あるとき、「すべての名前には名付け親がいるはずだから、意味があるはず」というごく当たり前のことに気づいたのです。そのカラクリを知りたいと思い、当時の大学の先生に質問してみましたが、誰も詳しいことは知りませんでした。

そうした経験から、大学で薬理学を教える立場になってからは、学生たちに少しでも楽しく薬の名前を覚えてもらいたいという思いから、授業の中で出てくる薬の名前の由来を可能な限り調べ、雑談の中で解説するようにしました。薬の一般名の大半は、化学構造を反映しているものが多いのですが、中には、神話に基づいた名前や、人名や会社名に由来した名前、色や物性に基づいた名前など、実に様々な来歴があり、それを話すたびに学生が「へえ〜」と頷く様子を見ているうちに、「すべての薬の一般名の由来を事典にしてみたい」という野望を抱くようになりました。

しかし、そのエビデンスとなる資料はなかなか手に入らず、実現するまでに長い時間を要しました。私が勤める武蔵野大学の出版会の編集担当の方にこの思いと企画案を伝えたところ、「是非やりましょう!」と後押ししてくださり、ついに形となったのが『薬名〔語源〕事典』です。

『薬名〔語源〕事典』が発刊されて間もないある日、その数年前に「抗認知症薬」の記事を寄稿する機会を与えてくださった薬事日報社大阪支社の栗山剛一氏に連絡をとり、「薬の名前には必ず由来があるから、それを知ることには意義がある」という私のねらいをお伝えしたところ、すぐに「おもしろい!」と共感していただきました。かくして『薬事日報』でコラム連載がスタートしました。

「薬の名前には意味がある」というタイトルの通り、毎回1〜5個程度の薬にスポットをあてて、その薬が誕生した背景や名前の由来を解説するだけでなく、関連した豆知識をちりばめることによって、読者の知的好奇心をくすぐるように心がけました。どちらかというとい医薬品業界のお堅い

ニュースが紙面を埋めている中に、ちょっと異質で、やわらかい感じのコラムが載っている物珍しさも手伝ってか、大きな反響がありました。

ある会合に出席した時に、他大学の先生から「薬事日報のコラム、毎回読んでいますよ。」とのお言葉をいただいたこともあります。大学の教え子から「コラム読みました！卒業生として誇りです！！」という嬉しいメールももらったこともあります。また、あるコラムで「間違えやすい薬名」の話題を提供し、「その原因は意味を考えないで丸暗記していることにある」と指摘したところ、現役薬剤師の方から「私も間違えていました。名前の由来を知っておくことって大事ですね。」というコメントもいただきました。

最初は「20回くらい連載できればいいかな…」くらいに思っていたのですが、多くの方から評価していただけた嬉しさからどんどん筆が走り、気がついたら、『薬事日報』での連載は100回を超えました。『薬名〔語源〕事典』には載せられなかった薬の来歴もたくさん書くことができました。コラムが書き溜められるにつれて、『薬事日報』上で読むことができなかつた方々にも読んでいただきたいと考え、78回分のコラムを再編・一部改変してまとめ、書籍化に至ったというわけです。

「薬の名前に意味がある」ことを知ると、単純に面白いのに加えて、色々な側面から役立つメリットがあるということが、できるだけ多くの方に伝わればと思います。

どうぞお楽しみに。

2022年11月

阿部和穂

意外な起源の薬

今の私たちは、科学の力によって自由に薬を作り出せるようになったと思いがちですが、歴史をたどると、薬の源は自然の力によってプレゼントされたものであることに気づかされます。先駆的な薬の名前に、神様や植物、動物にまつわるものが多いのは、まさにその証でしょう。地名や人名、社名が含まれた薬名もあり、名前からその薬の歴史をうかがい知ることもできます。意味を考えずに丸暗記していた薬の名前に、意外な起源が含まれていることを知ると、とても親しみが湧いてくるはずです。

第1章では、そんな薬名のお話をまとめました。



1

神聖な薬の名前

現在の創薬では、ハイスループットスクリーニング（ロボットや人工知能を用いて膨大な化合物の中から自動的に高速で新薬候補を見つけ出す技術）が当たり前となっている。無数の化合物ライブラリーの中から、標的分子に作用しうるものを迅速に選別することが可能になってきた。

そのためか、望んだ薬をいつでも自由自在に見つけ出せるかのように錯覚してしまいがちだ。しかし、病気の原因が分からず、どうしたら治せるのか分からない時代には、薬はとても神秘的なものだったに違いない。



夢の神に由来してつけられた薬

「くすり」の語源には諸説あるが、島根の出雲大社にある古文書では、「奇(く)すしき力を発揮するもの」という意味から「くすり」と呼ばれるようになったと説明されている。「奇すしき」は「並みより優れている、突き出た、不思議な、神秘的な」という意味で、病を治してくれる不思議な力をもったものが「くすり」ということだ。

では、最も古い薬は何だろうか。その答えは専門家でも迷うところだが、**モルヒネ**はその1つだろう。

ご存知の通り、ケシの未熟な実（いわゆるケシ坊主）に傷をつけて得られる白い乳液を乾燥させたものがアヘンであり、紀元前4000年ごろには古代メリア人が眠り薬として使っていたという記録がある。5世紀ごろにはイスラム圏の交易網が発達し、アヘンはインドや中国、アフリカなどに伝えられ、11世紀ごろには再びヨーロッパに伝わり、医薬品として麻酔や痛み止めに用いられるようになった。

19世紀初めにアヘンから有効成分を単離したドイツの薬剤師フリードリヒ・ゼルチュルナー（Friedrich Wilhelm Adam Sertürner）は、ギリシャ神話に登場する眠りの神Hypnosの子である夢の神Morpheusにちなみ、

その化合物をモルフィウム (**morphium**) と名付けた。後にその名は、オランダ語で **morfine**、そして英語で **morphine** と変遷した。

余談ながら、私のお気に入りの映画『マトリックス』(1999年、キアヌ・リーブス主演)にはモーフィアスという人物が登場する。主人公のネオを夢から現実へと誘う役割を果たすが、その名前はモルヒネと同じ夢の神 Morpheus に由来すると思われる。



神の名をもつ薬たち

神の名をもらった薬は他にもある。

たとえば、**アトロピン**は、ナス科の植物ベラドンナ(学名：**Atropa belladonna**)の根から単離されたことから命名された。ベラドンナは毒草で、誤って摂取すると死ぬ場合もあることから、ギリシャ神話に登場する運命の三女神の1人アトロポス(運命の糸を切るのが役割)にちなんで、属名 *Atropa* がつけられた。よって、“**atropine**”という薬物名には、「運命を断ち切る薬」という意味があると言える。

コルヒチン(**colchicine**)は、イヌサフラン(学名：**Colchicum autumnale**)から見出されたことから命名された。痛風発作に用いられるが、毒性の強い薬物である。イヌサフランの属名 *Colchicum* は、黒海に隣接していたアルメニアの古都市コルキス(Colchis)辺りに多く咲いていたことに由来する。ギリシャ神話には、コルキスの王女メーディアが魔法の薬草を使って暗殺するエピソードが書かれており、コルヒチンの毒性と残忍な王女のイメージがちょうど重なる。

対して、近代は次々と合成新薬が開発され、もはや薬は神秘的なものではなくなっているようだ。ともすれば「科学技術で自然を支配できる」と錯覚しがちだ。しかし、あまりおごっていると、自然から大きなしっぺ返しをくらうかもしれない。抗生物質や抗ウイルス薬の使用に伴って発生する「薬剤耐性」の問題などはその典型だろう。薬はもともと自然が授けてくれた宝物であることを忘れず、私たちはもっと謙虚でいなければならないのではないだろうか。

著者略歴

2022年 10月31日 現在

阿部 和穂

(あべ かずほ)



1963年愛媛県今治市生まれ。東京大学薬学部卒業後、東京大学大学院薬学系研究科修士課程修了。東京大学薬学部助手、米国カリフォルニア州ソーク研究所博士研究員、星薬科大学講師を経て、武蔵野大学薬学部教授。薬学博士。専門は脳と薬。著書に「マンガで読む脳と酒」(りこう図書 2007)、「認知症とたたかう脳」(理工図書 2008)、「危険ドラッグ大全」(武蔵野大学出版会 2016)、「認知症 いま本当に知りたいこと101」(武蔵野大学出版会 2017)、「大麻大全」(武蔵野大学出版会 2018)、「認知症 もっと知りたいこと99」(武蔵野大学出版会 2019)、「薬名[語源]事典」(武蔵野大学出版会 2020)、「<増補版>危険ドラッグ大全」(武蔵野大学出版会 2021)など多数。

薬の名前には意味がある

2022年 12月 12日 発行

著 者 阿部和穂
発 行 株式会社薬事日報社 (<https://www.yakuji.co.jp>)
〒101-8648 東京都千代田区神田和泉町1番地
電話03-3862-2141 (代表) FAX03-3866-8408
制作・印刷 クニメディア株式会社
イラスト 高村あゆみ

Printed in Japan 2022 ©Kazuho Abe ISBN 978-4-8408-1602-1

落丁本・乱丁本がございましたらお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

JCOPY <(社)出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail : info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。